



らず「鬼畜米英撃滅」「神州不滅」を叫び必死に頑張っていました。まさか日本が降伏するとは考えていませんでしたし、たとえ考えていたとしても到底それを口にできませんでした。

B29による空襲は激しさを増していましたが、それに対しては、もっぱら「大和魂」と「竹槍」で対抗する以外になく、老人や女性までも軍事訓練

に駆り出されました。すでに日本は制空権と制海権を完全に失っていたものの、陸軍は約400万(1944年末)がほぼ無傷で残っていたはずですが、大半は遠く南太平洋や東南アジアに展開しており、輸送船をすべて撃沈されてしまったため、動きがとれません。本土に残っていたのは約46万(総兵力のわずか11%)に過ぎず、とても本土決戦をやるには不足。それでも陸軍は強気で、徹底抗戦を叫び、本土決戦の準備をしていました。

前回に続いて、78年前(小生8歳)の夏の思い出を気ままに綴らせていただきます。(なお、前回は私の公式ホームページwww.kaneko-kokunao.jp/に掲載されていますので、お暇な折に自由にご覧ください)

ていました。どうやら、上陸してきた米軍を迎え撃ち、敵戦車に爆弾を抱えて飛び込む訓練などをしていました。その中の隊長らしき兵士が、野戦用の有線電話機を抱えていろいろ指示を出していましたが、長い電話線を重そうに引きずっていたのが印象に残っています。あれでは実戦になった時、自由に動き回れないだろう、大丈夫なのかなと思えました。夜になると、兵士たちは近隣の農家に分宿することになり、我が家にも

東北出身者という兵士が2人泊りました。母は苦労して集めたまきで風呂を沸かし、精いっぱいもてなしをしていました。

玉音放送の意味分からず
しかし、こうした国民の必死の頑張りも空しく、広島と長崎に原爆を落とされ、中立条約を結んでいたソ連にも突如攻

夜阿南惟幾陸相は「一死以テ大罪ヲ謝シ奉ル」の遺書を残して割腹自殺(ちなみに、後年外務省では遺児の一人が私の同僚でした。後に駐中国大使)。
翌15日正午の玉音放送は、リアルタイムで直接聞いた記憶がありません。学校は夏休みだったし、当時ラジオのある家庭はまれ。仮にあっても、雑音が多くて聞き取れなかっただろうし、漢文調の難しい言葉の羅列で、小学3年生には意味が全く理解できなかったでしょう。夕方になって、どこからともなく「日本は負け

て戦争は終わったらしい」といううわさを聞き、しばらくぼうぜんとした記憶があります。正直、戦争が終わってほっとしたというより、口惜しさの方が大きかったと思います。本人はいっぱしの軍国少年のつもりでしたから、勇ましく戦死する機会を失って残念だという気持だったのでしょうか。私の周りの大人たちの反応も大体同じでした。思うに、8月15日の受け止め方は、人によって、場所によって千差万別で、ごく一部の特殊な人を除いて、一般国民は大体同じではなかったかと思えます。(2面に続く)

78年前の夏の思い出 (続き)

本土決戦に備えた陸軍の軍事演習

そのため、三河地方にも、陸軍兵が配備され、日夜演習を行っていました。ある時学校からの帰り道、県道で演習中の歩

兵の一隊に出会いましたが、真夏なのに彼らは泥だらけになって道路の両側の溝に身を伏せたり、匍匐(ほふく)前進をし

ていました。どうやら、上陸してきた米軍を迎え撃ち、敵戦車に爆弾を抱えて飛び込む訓練などをしていました。

その中の隊長らしき兵士が、野戦用の有線電話機を抱えていろいろ指示を出していましたが、長い電話線を重そうに引きずっていたのが印象に残っています。

あれでは実戦になった時、自由に動き回れないだろう、大丈夫なのかなと思えました。

夜になると、兵士たちは近隣の農家に分宿することになり、我が家にも



玉音放送を聞いて皇居前で額つく人々(NHKアーカイブスから)

ある日突然米兵が学校にやって来た

9月になって久しぶりに学校へ行くと、ある日突然、3〜4人の米兵がジープに乗って学校にやってきました。目的は、

占領政策の一環として、教育制度を抜本的に改革するための実情調査だったと思います。それにしても占領後、日も浅いこの時期に、こんな田舎の小学校を含め、全国津々浦々の学校を調査して回るとは驚きであり、米軍がいかに余裕をもって、早くから占領政策を練り上げていたか。この一事をもってしても、とても日本が勝てる相手ではないなど、子ども心にも痛感しました。彼らは皆若く、つい数週間前まで日本と戦っていたとは思えぬほど穏やかな態度でした。詳しい内容は分かりませんが、校長室でいろいろ質問をしたり、調べているようでした。

その時ふと気が付いたのですが、彼らの一人は校門の近くにあって奉安殿（天皇陛下の教育勅語を常時保管しておく石造

時の私たちの驚きは、おそらくさらに90年前のペリ艦隊来航時の江戸町民のそれと同じだったのではないかと思えます。もちろんこの19年後、私自身が外交官として渡米して、アメリカ人と対等に付き合う日がくることは夢にも思いませんでしたが、あの日の体験が、私とアメリカとの関係の原点だったような気がします。

中学での最初の仕事は校舎づくり

こうして戦後の日々はドタバタした状態であわただしく過ぎ、11歳で小学校を卒業し、新しくできた村立東郷中学校に通うことになりました。中

一変した授業 内容と教科書

秋学期から学校の授業の様子が一変しました。これまで使っていた教科書は、軍国主義的と思われるところはすべて墨で塗られるか、糊で張られてしまつて、読むところは少ししか残っています。しばらくして、多分45年末ごろ、ようやく新しい教科書が配布されましたが、それは新聞紙の大きなザラ紙で、自分で八折くらいにはさみで切り、糸でとじて教科書にしました。厚さは5ミリくらい。内容は全く覚えていません。

78年前の夏の思い出

この雲泥の違い。ああ、これではとても勝てるはずがないかと再度実感しました。米兵たちは、一通りの調べを終えた後、校庭でしばらく生徒たちと交流しました。その時確かチョコレートやチューインガムのようなものを生徒たちに分けてくれましたが、さすが私は手を出せませんでした。日本語の出来る二世兵士が通訳していましたが、おおよそ兵士らしからぬ気さくな振る舞いに、子どもながら感心した記憶があります。その

学校の言つても校舎は無し。最初の1年は、東郷東小学校に間借りをしました。授業はほとんど受けずに、連日新校舎の建設工事の手伝いをしました。真夏の炎天下に汗だくになって、近くの豊川（とよがわ）の河原から、校舎の基礎工事用の「ぐり石」を見つけ、一人1個ずつ運びました。ようやく完成し、2年生の新学期から、新しい校舎での勉強が始まった時の感激は一入（ひとしお）でした。自分たちの手でつくった校舎だという満足感がありました。

個性的な先生たちとの心の交流

中学校の先生もいわば寄せ集めで、今思うと立派な先生も多数いました。随分ひどい先生もいました。中には「特攻崩れ」とおぼしき先生もいて、往復ビンタは日常茶飯事。一人でも宿題をやつてこない生徒がいるとクラス全員が罰を食らい、ひどい目に遭いました。先生による体罰は原則禁止の現在では絶対に考えられない状況です。おかげで、その先生の担当の英語が大嫌いになり、随分損をしました。

他方、戦地から復員してきた、他に適当な職もなく、地元の小学校や新制中学校で教師になった人も少なからず。その中には東京の一流大学で教授を務まるくらいの学識を持った先生もいました。共産党まがいの左翼思想の持ち主もいたようです。実は私も、そうした先生の影響を受けた時期があり、授業をサボつて、そうした先生に連れられて代議士の選挙運動を手伝ったこともありま



蒲郡市の竹島にやってきた進駐軍(占領軍)兵士たち(金平町の市川泰弘さんの資料から)

貧しくも充実した人生経験

このように書いてくると、私たちの少年時代は、貧しく苦勞も多かった。78年前のあのみじめな敗戦から立ち直り、刻苦勉励、日本人としての誇りを取り戻す、まさに「坂の上の雲」の時代を体験した世代の一人として、このことをはつきり胆に銘じておきたいと思いま

かねこ・くまお

元キャリア外交官。ベトナム戦争の最盛期にサイゴンの日本大使館で勤務し、死線を潜った経験を持つ。環境問題の黎明期に「かけがえのない地球」のスローガンを自ら創案し、環境外交の最先端で活躍。その後第1次石油ショック(1973年)を契機に環境派から原子力推進派へ転向。外務省初代原子力課長、日本国際問題研究所研究局長、外務参事官などを歴任。退官後東海大学教授。現在はエネルギー戦略研究会会長のほか、外交評論家として幅広く活躍中。米ハーバード大学法科大学院卒(LLM)。新城市出身、86歳。